

## 『つよく、かしく、あたたかく』 沼田定次

「戦後五十年教育の変遷」 子どもたちとのふれ合い 小学校退職校長たちの回顧 (文芸社) より

昭和51年4月1日付で、私は新任校長として、NのM校に補された。5年の教頭経験を経て、49歳の、当時としては、まさに新進気鋭の「新米校長」だった。

赴任校は、歴史的社会的に同和問題とかかわりのある地区にあり、同和对策審議会の答申による東京都の教育施策である「学力水準向上事業」対象校となっており、人権尊重教育の推進が学校の課題であった。同和教育は、国民的課題である同和問題を解消することができる人間の育成を目指す教育であるが、私達東京の教師は、正直に言って、同和問題に対する基本的認識が必ずしも深いものでなく、昭和40年代に高まりつつあった、いわゆる解放運動のエネルギーや解放運動を進めているいくつかの「運動体」の活動に対して、一種の戸惑いや、おそれのようなものを抱いているようでもあった。

私もこの点については例外ではなかったが、赴任にあたってこれからはしっかり勉強し、全力で学校経営にあたらせようという意気込んでいた。およそ公立学校の教育は、国の基準とその学校の地域の実態によって進められなければならない。同和对策特別措置法によって地域指定がされている地域と、東京都のように、地域指定の困難な地域における同和教育は全く同じというわけにはいかない。

東京都では、51年に「学校の全教育活動を通して、同和教育の視点を明らかにした人権尊重教育を推進する」という基本的な考え方を示した。

私は、赴任後、まず、N区の解放同盟の書記長としばしば面談の機会をもち、お互いの考えを語りあって、信頼関係を築き、運動は「同盟」で、教育は学校でそれぞれ主体的に行い、これについての条件整備の要望は教育委員会を通して行うという基本線を確認し合った。

「学校では、一人ひとりを大切に、差別をしない。させない。許さない。基礎学力の身についた子供を育てる」というと、書記長は「学校のことは先生に任せます」といってくれた。それだけに、このことをどのように具体化するかについて、重い責任を自覚させられた。このため、このM校での在勤7年の間は同和問題についての学習や、情報収集と、人権尊重教育の理論構築に励んだ。

理論構築といっても、何も無理して難しいこと考えるのではなく、これまでの学校教育における私達の足をふり返り、いろいろな問題を人権の視点から見つめ直すことから始めた。私は、「教師が一人ひとりを大切に、子供たちはお互いを大切に、学校で学力と集団生活を向上させることは、教育としてあたりまえのことである。人権尊重委の教育は何も特別のことはするのではなく、あたりまえのことを、あたりまえに、手を抜かず行う、いわば教育の本質の追求にほかならない」という結論に達し、このことを学校内外で協調し、理解を求めた。

学力水準の向上については、「学力」を基礎学力の三R、即ち、「読み、書き、計算」とおさえ、どの学年学級でもこのことを身につけさせる共通の努力を重ねた。

特に「人ひとりを大切に」というこの分りきったような言葉を掘り下げて、一人ひとりの何を大切にすることを明らかにしようとし、端的にそれは一人ひとりの「ちがいを大切にすることであるとし、その「ちがい」を絶対的ちがいである「異」と、相対的ちがいの「差」ととらえ、「異」を尊重し、「差」を縮めることが人権尊重教育の基本であると、おさえた。

今日、個性重視の教育が改めて協調され、「ちがい」の尊重が叫ばれるが、今から二十年前に、人権尊重の教育は「ちがい」の尊重の教育であると唱えたことに愉悦を感じる。

一方生活指導では、返事、挨拶、記名、後始末等、明治以来の日本教育で最も徹底しないことを人権尊重教育の重点にした。返事は自己の人権の尊重、挨拶は自他の人権尊重、記名は自他の所有権の尊重、後始末は公共の使用権の尊重などと、その根拠を人権に関連させた。

さて、このような考えを浸透させるため、私は「人にも物にも思いやり」を持つとうといい、スローガンのように「つよく、かしく、あたたかく」を全校の合い言葉にした。この合い言葉は、三、四、五のリズムになっているせいか、誰にでもすんなりと受け入れられ、私がM校を去る年度にあげた同校開校30周年記念に立てた掲揚塔の土台石に文字でこの言葉が刻み込まれている。M校はその後も一貫して人権尊重教育にとり組み、ときどきその成果を発表するが、この「つよく、かしく、あたたかく」は人権尊重教育をシンボライズする言葉として、いつも登場する。返事、挨拶、記名、後始末の4つが次第に徹底しはじめ、校内は落ち着きと明るさを増してきた。(略)